プロティノスの
「有るものは同一のものでありながら、同時に全体としてあるとこころに存在するということについて第二論」VI-5-(23)

1
「我において一つの同じ力が全後たいたるところに所属あるということは、共通動産であるとは主張する

2
なぜなら、万人が自分の本性に刻まれて、「われわれ各人に善いものは神は、一つの同じものであると言うからである

4
そしてもしも人が語らん、その神はどのようにして存在しているのか疑問なら、また彼の思解を言葉によって呼吸しようとしないならばあれは、

3
彼らはだからのことのみを真剣に求め、これ者らの思想の活動の源泉に向かう。つまり一つの同じものにいわば眼鏡から、静かなるきおくなるであろ、そのーに到達を得ようなことは、決してしないであろう。

13
なぜなら、もしそれでわれのボーンつを無望し、かつ一つで無望し、そしてまたまはそのーつであるこのへの欲求であれば、この原理はあの原理に先立って見たりさるからである

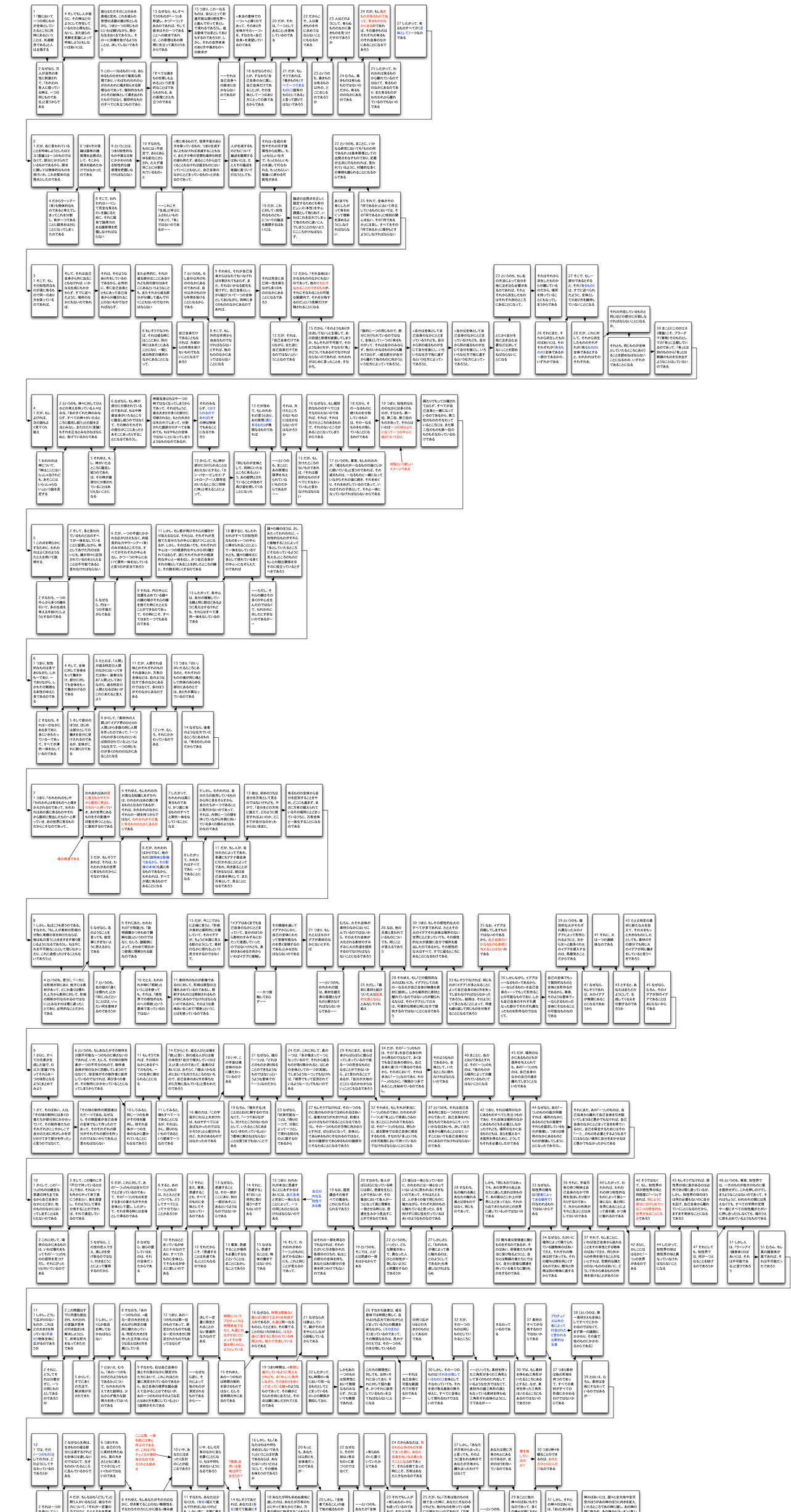
15
つまり、このーなるものは、自らにとって所属可能な原理性界へと進んで行ってまとこ、そのことによって、そのあの方を自分のものとしたのである

<本当の意味でのーつへと導くの力を、それらは、自身へ自覚しているのである

20
だが、それは、「一つ」とあるこのものである

22
だからこそ、人は意思のもとに、自らの本性のもとに、自己のもとにあるのである

23
人はどのようにして、自らのもとにあるのであるか

24
もし、あるものがあるものであって、あるもののもとあるのであれば、それは、自己のもとにあるのであろう

27
したがって、有るものがすべてが「自己のもとにて」ーつなのである